

京都大学	博士（文学）	氏名	福浦 一男
論文題目	北タイ、チェンマイの霊媒集団とその宗教実践		
<p data-bbox="183 398 438 432">（論文内容の要旨）</p> <p data-bbox="164 439 1430 703">本論文は、北タイ、チェンマイの伝統宗教である霊媒術に関する研究である。個々の霊媒によるセアンスに加えて、霊媒たちの集団儀礼に焦点を当て、霊媒術とその宗教実践の全体像を明らかにすることで、20世紀後半以来のチェンマイの霊媒術研究に新たな民族誌や視座を提示し、現代タイの地域社会における宗教文化の重要性を明示している。さらに本論文は、北タイの宗教実践の事例を通して、現代世界における近代化と宗教現象の関係性に関する新たな視座を提示し、現代世界のなかの民衆の宗教実践とその可能性について論じている。</p> <p data-bbox="164 710 1430 1016">序章では、現代世界におけるさまざまな宗教現象や宗教復興運動を単なる社会変容のインデックスとみなす、いわゆる還元主義的傾向を批判しつつ、タイ社会と宗教の不可分なむすびつき、さらには20世紀末以来のチェンマイの社会変容と霊媒術の復興について包括的に論じた。タイは上座部仏教国であるが、精霊信仰をはじめとする民間宗教も社会の隅々に浸透している。近年、都市化・消費社会化が進展するにつれて、民間宗教の新たな潮流がタイ社会に出現しており、チェンマイの霊媒術もその一つである。霊媒術は、伝統的な精霊信仰に根ざしながら、村落域の中間階層・下層の人びとに対する影響力を持っている。</p> <p data-bbox="164 1023 1430 1563">第1章では、現代のチェンマイの霊媒術の復興現象が、ラーンナー王国時代以来の精霊信仰と深いつながりを持つことを確認した。チェンマイは13世紀末に伝統的都市国家ムアンとして建設され、このチェンマイを中心とするラーンナー王国は、20世紀初頭まで存続した。ラーンナーの社会空間や生活空間の随所には、精霊が宿るという信仰が存在し、なかでもチェンマイの守護霊祭祀は、歴代の王権の正統性を構築し、自らの国家権力を維持する役割を果たしていた。20世紀初頭のシャムへの統合によって王権の正統性が弱体化するにつれ、チェンマイの守護霊祭祀は衰退していったが、人びとのあいだでは、社会空間や生活空間の随所に精霊が宿るという信仰が、今もかなりの程度保持されている。1970年代以降、近代化の波が北タイにも押し寄せると、伝統的な枠組みを大きく超えた新たな霊媒術とその宗教実践が出現し、21世紀を迎えた今も、チェンマイ地域社会に定着している。霊媒術の霊媒の憑依精霊には、伝統的な共同体の守護霊と並んで、託宣を与える位の高い守護霊として一括される精霊がある。霊媒術の主要な宗教実践には、個々の霊媒が信奉者の要請に応じて執り行うセアンスと、霊媒たちが集団で実施する儀礼の2つがある。</p> <p data-bbox="164 1570 1430 2069">第2章では、2名の長老格の女性霊媒とその信奉者によるセアンスの諸事例について検討し、霊媒術がチェンマイ地域社会とどのような関係を取り結んでいるのかを考察した。セアンスにおいて、信奉者は精霊に相談しながら様々な悩みや問題の解決を図る。一方の霊媒は、地域的伝統に則しつつ、社会変動のせいで曖昧になった文化環境を再編成する役割を担っているが、他方の霊媒は、地域的伝統に則しつつも、都市化する社会環境を再解釈する役割を果たしている。2名の霊媒のセアンスは、一見相異なっているように見えるが、そこには共通する傾向が存在する。つまり、信奉者は、「この世」と「あの世」を行き来する能力を持つ霊媒に依拠した、社会生活全般の安定を求めており、霊媒の側でもそのような信奉者の希望に沿う形でセアンスを実施している。両者共、信奉者の心身の安定を儀礼的に保証しようとする点において共通しており、そもそも霊媒のセアンスは、過去数十年間の社会変動に直面しながらも、その自律的で潜在的な適応力を発揮しつつ、新たな儀礼的慣習を創造することで、セアンスの境界や能力を拡張してきたのである。</p>			

第3章では、伝統的都市国家ムアンの基柱という儀礼的象徴に関する公式儀礼と、この基柱の守護霊を崇拝するいくつかの精霊憑依儀礼について考察した。このような儀礼的象徴自体は、ムアンとしての歴史を持つインドシナ半島各地に存在するが、チェンマイの基柱には「インドラ神の柱」という固有名があり、その由来は、上座部仏教宇宙の中心である須弥山に止住するインドラ神が、柱の神通力により、危機に瀕したチェンマイの人びとを救ったという神話である。霊媒たちは、チェンマイの公式儀礼であるインドラ神の柱を崇拝する儀礼において儀礼司祭の役目を果たしながら、同時に、基柱の守護霊を崇拝するいくつかの年中行事的な精霊憑依儀礼を組織している。なかでも、旧市街北東角の守護霊祠における2種類の精霊憑依儀礼にはおおぜいの霊媒が集合し、生演奏の伝統音楽に合わせて、チェンマイの守護霊にダンスを奉納する。この基柱とその守護精霊信仰を軸として、インフォーマルな霊媒集団が実践的に形成されている。

第4章では、この霊媒集団と伝統的な共同体の接合に焦点を当てると共に、個々の霊媒が主催する年中行事的な集団儀礼について考察した。伝統的都市国家ムアンとしての歴史の他にも、チェンマイの地域社会には親族集団や村落共同体などの伝統的な共同体が存在し、これらは精霊信仰と不可分の関係にあるが、近年、霊媒術の霊媒たちが、これらの共同体と接合して、協同で儀礼を開催する場合が間々ある。グローバル化とは別個の回路のなかで自律的に展開する霊媒術とその宗教実践は、伝統的な共同体とその価値を再認識し、新たな儀礼的協同を実現している。さらに個々の霊媒は、少なくとも年に一度、年中行事的な集団儀礼を主催しており、「ヨック・クー」（師の霊への崇拝儀礼）はその代表例である。儀礼会場にはおおぜいの霊媒たちが集い、賑やかな音楽に合わせて主催精霊にダンスを奉納する。このような儀礼が、主催霊媒を交代し、儀礼会場を移動しながら、雨安居期を除いて連日のように行われている。ヨック・クーは、チェンマイ郡とその周辺地域を横断的に結び付け、さまざまな精霊信仰のジャンルを横断的に接合しながら、異種混浴的な霊媒集団を構築し続けている。

第5章では、チェンマイの集団憑依儀礼の原型とも言える母系祖霊崇拝儀礼ピー・メン（モン族の祖霊）と霊媒術の集団儀礼を、演劇的シークエンスや儀礼音楽といった儀礼的パフォーマンスの観点から比較考察し、一見非常に異なるこれらの儀礼が、細部に至るまで地域社会の社会関係のコンテクストのなかにあるということを明示した。一方で、ピー・メンは、ラーナー王国時代の村落域の歴史的記憶に関する数々の儀礼的シークエンスで構成されており、ゆるやかな世俗化を包含しつつ、伝統志向的・内部充足的なアイデンティティを構築している。他方、霊媒集団儀礼は、チェンマイ地域社会の歴史性と現代性に纏わるゆるやかなエピソードを背景とした、多種多様な憑依精霊を有する霊媒たちの結び付きとして示されており、現代志向的・外部拡張的なアイデンティティを構築している。方向性こそ異なるものの、それぞれが文化的・社会的アイデンティティを再生産し、発展させることに寄与している。

第6章では、霊媒術の共同体主義的な傾向を裏付ける新たな儀礼創造の事例として、ラーナー王国の初代王マンラーイをはじめとする13世紀の北タイの3人の王を崇拝する新たな儀礼について検討すると共に、これを契機に結成された霊媒たちの新たな互助団体の試みについて考察した。この儀礼は、1,000人もの参加者を集める、チェンマイ最大規模の儀礼であり、旧市街中心部の広場では、チェンマイ建都に関わる3人の王を崇拝する霊媒集団儀礼と、2種類の母系出自集団による精霊憑依儀礼が同時に展開される。これらの儀礼コミュニティが互いに接合することで、還元不可能な一つの全体性としての新たな儀礼コミュニティが多層的・重層的に形成される。グローバル化の影響の本質が均質化だとするならば、この儀礼は、この均質性に対して地域的な標準を対置することによって、微細で地域的な文化的自律性を生産・再生産している。さらに、この儀礼を契機に組織された霊媒たちの新たな互助団体の試みは、こ

れまでのインフォーマルな霊媒集団の枠を超えて、伝統的価値の体现者を自任する霊媒を組織する試行的な動きであり、そこに、霊媒たちの自律性と独自性を認めることができる。

終章では、チェンマイの霊媒術の宗教実践の創造性とエイジェンシーについて包括的に論じると共に、現代世界のなかの民衆の宗教実践とその可能性について論じた。チェンマイの霊媒集団とその宗教実践全体を通して、民衆が持つ状況を変革する力としての創造性が作動しており、この創造性が、宗教実践の自律的な展開力や突破力を生み出している。さらに現在、チェンマイの霊媒たちは、生活空間や社会空間のなかに存在するとされる精霊全般から、伝統的都市国家ムアンの守護霊に至るまで、精霊信仰のあらゆる局面に関与しており、地域社会の儀礼的エイジェントの役割を引き受けつつあると言える。北タイ、チェンマイの霊媒術のような儀礼の復興は、本質性を前面に出しながらも、実質的には現代世界に対する社会の周縁性を相対化し、馴致してゆくための戦略となる。現代世界のセッティングのなかで、儀礼を通して生み出されたローカルな力は、儀礼そのものと表裏一体の関係にあり、人間の手によりパフォーマンスに生み出されるが、人間の認識を超えたところに位置し、人間社会に影響を与えるのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、近年北タイ社会で活性化している伝統的な霊媒術の分析を通して、現代世界における宗教復興現象に対して新たな理論的視点から分析を試みる野心的な研究である。と同時に、2001年3月から2013年3月まで、のべ35ヶ月の長期におよぶ集中的なフィールドワークに基づく精密で貴重な民族誌的研究でもある。

本論の社会学的意義は以下の2点に要約される。第一の意義は現代世界の宗教復興現象の解明に関する理論的な貢献である。20世紀末からの急激なグローバル化の進展は、一方で市場経済を基礎とした世界の均質化をもたらしたが、他方で合理的で普遍的な経済活動とまったく異質な「非合理的」でローカルな価値・思考・実践の勃興を生み出した。世界各地における宗教復興運動もその一つであり、伝統的な呪術や「オカルト」の再活性化はその極端な事例として多くの宗教社会学・人類学的な研究が蓄積された。そのなかでもっとも支配的な見解は、P. ギシエーレなどが主張するもので、伝統的宗教や呪術の復活を、グローバル資本主義によって生活世界の基盤を解体された人々の世界再構築の実践としてとらえるものだった。ギシエーレやF. ニャムンジョたちは、アフリカの大都市社会で生起するウィッチクラフトの活性化現象が、都市社会のなかで最周縁部に排除される脆弱なコミュニティだけでなく、新たに出現しつつある中間層の一部をまきこんで、広範に進展している現状を、大都市社会の構造変化と重ね合わせて考察した。さらにJ. & J. コマロフ夫妻は、こうしたギシエーレたちの視点を深化させて、20世紀末に出現した千年紀資本主義こそが世界各地のオカルト・ブーム増殖現象の直接の原因であり、この現象は同時に、人知を超えて一瞬にして生活世界を破壊してしまう千年紀資本主義に対する人々の抵抗的实践にもなりうることを指摘した。本研究は、こうしたギシエーレ、コマロフ夫妻的な視点の有効性を認めながらも、これらが宗教的实践の全体を社会的構造によって規定されるとみなす過剰な社会学主義に陥っていると批判する。そのうえで、複雑で多様な様式で生起している宗教的实践そのもののもつ自律的な展開力に注目することを提唱している。もちろん、この視点は、宗教的实践を社会的なるものから切断しようとするものではない。ただ、グローバルなネオリベラル・エコノミーの圧倒的な影響力にすべてを還元して理解することを回避し、宗教实践がもつ固有の価値、思考、行為の生成メカニズムをすくい上げようという試みなのである。

本研究の第二の意義は、現代北タイ社会において復興、再活性化しつつあるさまざまなレベルの宗教現象が複雑に錯綜しつつある状況を精緻なフィールド調査によって解きほぐし、その全体像をダイナミックに描き出した実証的研究としての貢献である。北タイ社会においては前世紀末から、いくつもの起源や性格の異なる伝統的宗教現象が再活性化しつつある。こうした伝統的宗教現象について、本研究では、まず伝統的な霊媒師が実践するセアンスをコアとしたネットワークが、都市化にともなって、伝統的な地域共同体を超えてひろく組織化される一方で、その手続きや解釈は旧来の枠組が再生されている様子を綿密に描写する。つづいて近代国民国家の成立と発展の過程において、新たに北タイ社会が創造した伝統として、伝統的都市国家ムアンの守護霊をコアとした精霊憑依儀礼が考察される。伝統的都市国家というユニットを再認させるための、多様な神学的解釈と歴史的正当化の言説、およびそれらに符合した宗教实践が儀礼司祭（霊媒自身）によって再編統合されるのである。このムワンをユニットとした世界に、伝統的村落共同体および親族共同体が蓄積し実践してきた精霊信仰の世界が複雑に接続することになる。そのダイナミズムを分析した第四章は本研究の精華でもある。さらに本論は、北タイ社会の集団憑依儀礼のプロトタイプともよべる母系祖霊崇拜儀礼にまつわる霊媒術の復興にまで分析の射程を拡げて、多層におよぶ宗教实践の全体像を描き出した。このように本研究においては、伝統的宗教实践の再活性化とひとくくりになされてきた錯綜し

た現象を、伝統的霊媒師のセアンス、親族共同体の精霊信仰、村落共同体の精霊信仰、母系祖霊の崇拜信仰、都市国家の守護霊憑依などについて、それぞれが持っている異質な起源と展開力、手続きと組織化の多様性をたんねんに腑分けして考察した。それだけにとどまらず、それらの諸信仰、諸実践を正当化する言説の生成とそれら相互の緊張と葛藤を調整するメカニズムの解明までも試みた点で、これまでの研究史に新たな地平を切り開いたと評価することができる。

この地平の先に、本研究が最終的に見通そうとしたものがある。それは、人々が生活世界のなかで創造してきた民衆の多様な宗教実践の積み重ねそのもののなかに、世界を再解釈し状況を変革する創造性とエージェンシーが見出されるという展望である。

このように本研究は、長年にわたる北タイの現地調査のなかで、とりわけチェンマイ大学社会科学部社会学・人類学研究室との協同討議を継続し、タイ語、英語での成果報告を通して、その視点の核心を現地のみならず国際的な北タイ地域研究者のなかでも高く評価されるものとして位置づけられている。

とはいえ本論に問題がないわけではない。ギシエーレ、コマロフ的視点は、2010年代にはいって支持派と批判派の理論的な論争のなかで、多くの修正や再編がなされているが、それについての検討は十分なされていない。また状況変革の創造性とエージェンシーを宗教実践のなかに見出そうとする結論については、データから直接導き出されたとは言いがたい。しかし、こうした弱点も本論の意義を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年6月13日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。